

公望可臣印全集

第二卷



谷崎潤一郎全集 第二卷

定價一五〇〇圓

昭和四十一年十二月一日印刷
昭和四十一年十二月十五日發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 宮本信太郎

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二―
電話(五六一)五九二二
振替東京三四

目次

恐怖

一

少年の記憶

三

戀を知る頃

三

熱風に吹かれて

壹

捨てられる迄

一七

憎念

二七

春の海邊

三〇

饒太郎

三五

金色の死

四三

お艶殺し

五〇

懺悔話

卷二

恐
怖

大正二年一月「大阪毎日新聞」

私がああ病氣に取り憑かれたのは、何でも六月の初め、木屋町に宿泊して、毎日のやうに飲酒と夜更かしとを續けて居た前後であつた。——尤も其の以前、東京に居る頃も一度ならず襲はれた覚えはあるが、禁酒をしたり、冷水摩擦をしたり、健腦丸を呑んだりしてやつと、さと恢復し切つて居たのだ。それが京都へ來てから、再び不秩序な生活に逆戻りした結果、知らず識らずブリ返して了つたのである。

友達の本——さんの話に依ると、私の此の病氣——ほんたうに今想ひ出しても嫌な、不愉快な、さうして忌まじましい、馬鹿々々しい此の病氣は、Eisenbahnkrankheit（鐵道病）と名づける神經病の一種だらうと云ふ。鐵道病と云つても、私の取り憑かれた奴は、よく世間の婦人にあるやうな、船車の酔とか眩暈とか云ふのとは、全く異なつた苦惱と恐怖とを感じるのである。汽車へ乗り込むや否や、ピーと汽笛が鳴つて車輪ががたん、がたんとき出すか出さないうちに、私の體中に瀰漫して居る血管の脈搏は、さながら強烈なアルコールの刺戟を受けた時の如く、一舉に腦天へ向つて奔騰し始め、冷汗がだくだくと肌に湧いて、手足が悪寒に襲はれたやうに顫へて來る。若し其の時に何等か應急の手あてを施さなければ、血が、體中の總ての血が、悉く頸から上の狭い堅い圓い部分——腦髓へ充滿して來て、無理に息を吹き込んだ風船玉のやうに、いつ何時頭蓋骨が破裂しないとも限らない。さうなつても、汽車は一向平氣で、素晴らしい活力を以て、鐵路の上を眞ツしぐらに走つて行く。——人間一人の命なんかどうなつても構はないと云ふやうに、煙突から噴火山のやうな煤煙を爆發させ、轟々と冷酷な豪膽な呻りを擧げて、眞暗な

トンネルをくゞつたり、長い長い剣難けんなんな鐵橋を渡つたり、川を越え野を跨またぎ森を繞めぐりながら、一刻の猶豫もなく走つて行く。乗合ひの客達も、至極のんきな風をして、新聞を読み、煙草を吹かし、うたゝ寝を貪り、又は珍らしさうに眼まぐるしく展開して行く室外の景色を眺めて居る。

「誰れか己を助けてくれエ！ 己は今腦充血をおこして死にさうなんだ。」

私は蒼い顔をして、斷末魔だんまつまのやうな忙せはしない息遣いきづかひをしつゝ、心の中であう叫んで見る。さうして、洗面所へ駆け込んで頭から冷水を浴びせるやら、窓枠にしがみ着いて地團太ちだんたを踏むやら、一生懸命に死に物狂ひに暴れ廻る。

どうかすると、少しも早く汽車を逃れ出たい一心で、拳固から血の出るのも知らずに車室の羽目板をどんどん叩きつけ、牢獄へ打ち込まれた罪人のやうに騒ぎ出す。果ては、アハヤ進行中の扉を開けて飛び降りをしさうになつたり、夢中で非常報知器へ手をかけさうになつたりする。それでも、どうにか斯うにか次ぎの停車場まで持ち堪たへて、這々はふくの體でプラットフォームから改札口へ歩いて行く自分の姿の哀れさみじめさ。戸外へ出れば、をかしい程即坐に動悸が靜まつて、不安の影が一枚一枚と剝がされて了ふ。

私の此の病氣は、勿論汽車へ乗つて居る時ばかりとは限らない。電車、自動車、劇場——凡て、物に驚き易くなつた神経を脅迫するに足る刺戟の強い運動、色彩、雑沓に遭遇すれば、いついかなる處でも突發するのを常とした。しかし、電車だの劇場だのは、恐ろしくなると直に戸外へ逃げ出す事が出来るだけ、それだけ汽車程自分を Madness の境界きやうがいへ導きはしなかつた。

其の病氣が、いつの間にか自分の體へブリ返して居る事を心付いたのは、六月の初め、京都の街の電車に

揺られた時であつた。私は當分、汽車へ乗る事を絶対に斷念して、病氣の自然に治癒する迄、東京へは歸れないとあきらめて了つた。さうして、是非共此の夏中に受けなければならぬ徴兵検査を、何處か京都の近在で、汽車へ乗らないでも濟む所で受けたいものだと思つた。

調べて見ると生憎京都の近所はみんな時期が遅れて間に合はなかつたが、大阪の住友銀行の友人〇君の盡力で、阪神電車の沿道にある一漁村へ、検査の二三日前迄に籍を移せば、其處で受けられる事になつた。其の村の検査日は何でも六月の中旬であつたと覺えて居る。

兵庫縣下なら、汽車へ乗らずとも電車で行けるから、東京の原籍地へ戻るよりはいくらか増しだと私は喜んだ。で、丁度月の十二日の午ごろ、日本橋の區役所から取り寄せた戸籍謄本と實印とを懷にして、五條の停車場へ行つた。

眞夏らしい日光がきらきらと、乾燥した、埃の多い京都の街の地面に反射し、晴れた空が毒々しく油切つて、濃い藍色を湛へて居る日であつた。俤へ乗つて停車場へ赴く途中、お召の單衣に紹の羽織を重ねて居る私は、髪の毛の長く伸びた揉み上げの邊から、べつとりした血のやうな汗が頬を流れ落ちて、襟の周圍へにじみ込むのを覺えた。五條の橋から遙に愛宕山を望むと、恰も熔鑛爐の底から煽り上る熱氣に似た陽光が麓に打ち煙つて、遠くの野や林はもやもと霞に曇り、近い町々の薨や石垣や加茂川の水は、正視するに忍びない程、クツキリした、強い色彩に染られて、生々しいペンキ塗りの如く私の瞳孔を刺した。切符賣場の前で梶棒を据ゑられた時、私は俤から下りようとして、着物の裾が汗ばんだ兩脛へ粘り着いた爲めに、危く脚を縛られて倒れさうになつた。

電車ならば大丈夫……かう信じて、無理やりに安心しようと努めて居た私の神経は、もう此の暑熱の威嚇にさへ堪へられなくなつて居たのであつた。天満橋までの切符を買つたものゝ、兎に角七八分休息した上、神経の鎮靜するのを待たうと思つて、力なくベンチへ腰を掛けたまゝ、私はぼんやりと、乞食のやうに大道を眺めて居た。

電車が、市街の其れよりはもつと頑丈な、猛獸を容れる檻の如く暗黒に分厚に造られた電車が、何臺も何臺もぶうツ、ぶうツと警笛を鳴らしつゝ大阪の方から走つて來て澤山の乗客を吐き出して、入れ代りに多勢の人數を積み込むと、再び大阪の方へ引き返して行く。二三分置きに次から次へと、幾回も發着する。私は勇を鼓して何度も立ち上つたが、改札口の處まで行くと、恐ろしい運命に呪はれた如く足が竦んで、動悸が激しくなつて、又よろよると元のベンチへ戻つて來た。

「旦那、俵はいかゞでございます。」

「ナニいゝんだ。己は人を待ち合せて、大阪へ行くんだから。」

こんな事を云つて、車夫を追拂ひながら矢張りいつまでも腰を掛けて居た。「大阪へ行くんだから。」と答へたのが、自分には何だか、「もう直死ぬんだから。」と云ふやうに響いた。「If any one should ask you, say I've gone to America!」かう叫んで、言下に右の蟬谷へピストルをあてゝ自殺をした『罪と罰』の中の Svidrigailoff のやうに、「私は大阪へ行くんだから。」と云つて、忽ち眼を舞はして此の場へ悶絶したら、あの車夫はどんなに吃驚するだらう。

時計を見ると彼れこれ一時である。村役場の引けるのは三時か四時か知らぬが、どうしても今日中に手續

きを濟まして置かなければ、検査を受ける譯に行かない。折角友人に奔走して貰つた親切を無にしなればならない。私はふと一策を案じ出して近所の洋酒屋からスコツチ、キスキのポケット入りの壘を購つた。さうして、ベンチへ凭れながら、其れをグビリ、グビリ飲み始めた。

酒の力で神経を一時麻痺させれば、大概の恐怖は取り除かれると云ふ事を、私は此れ迄の自己の経験に依つて、迷信的に信じて居た。一番ぐでん、ぐでんに酔拂つた揚句、前後不覺になつて電車へ乗り込んだら、どうにかした拍子に氣が紛れて大阪まで無事に行けるだらうと思つたのである。

不自然な、強制的なアルコールの酔が次第次第に肥え太つた私の肉體へ浸潤して來た。ぢつと大人しく腰掛けて居ながら、氣違ひじみた酩酊が立派に魂を腐らせて行き、官能を痺れさせて行くのが、自分でもよく判るやうに感ぜられた。私はいつか、とんとした、慵げな眼を見張つて、賑かな、明るい往來の、種々雑多な音響と光線の動搖を凝視して居た。

五條橋の袂を、西東から行き交ふ人々の顔が、みんな汗にうぢやぢやけて、赤く火照つて、飴細工の如く溶けて壊れ出しさうに見えた。紹縮緬や、明石や、いろいろの羅衣にいたはられて居る若い美しい女達のむくむくした肉が、一樣にやるせない暑さを訴へて、豚の體のやうにふやけて居るのを見た。汗………夥しい人間の汗が、蒸し蒸しした空氣の中へ絶えず發散して其處邊一面に漂ひ、到る所の壁だの板だのにべとべととこびり着いて居るらしかつた。——「街には汗の靄が立つて居る。」——と、誰か、デ

カダンの詩人が歌ひさうだ。………

活動寫眞の布へ皺が寄るやうに、時々、街路の光景が歪んだり、凹んだり、ぼやけたり、二重になつたり

して、瞳に映つた。「もう己は何も判らない程酔つて居るのだ。」と云ふ事が、自分の氣を強くさせ、大膽にさせる唯一の手頼りであつた。

私はいよ／＼電車へ乗る可く決心して、途中で酔の覺めないやうにもう一本キスキーを購つた。それから、萬一、萬々一例の恐怖に襲撃された時の要心に、頭を冷す爲めの氷のブツ、カキを買つて、其れをハンケチへ二重に包んだ。

こんなにして、上り降りの群衆に揉まれながら、辛くも改札口まで押し出されて行つた私は、切符に鉄を入れて貰らつて、ブラツトフォームへ漕ぎ着けるや否や、再び其處に呪はれた運命が待伏して居たのを發見した。ぶうツ、ぶうツ、ぶうツ、物凄い鼻息を打つかけて、傲然と出發の用意を整へて居る車臺を見ると私の神経は、アルコールの酔を滅茶々に蹈みにじり、針のやうな鋭敏な頭を擡げて顫へ戦き出した。同時に居ても立つても溜らないやうな、一遍に魂を引裂いて發狂か卒倒の谷底へ突き落し兼ねないやうな、どえらい恐怖が五體に充滿して來たので、私は思はずハツと躍り上つた。

「君、君、僕は今切符を切つて貰つたんだが、少し待ち合はせる人があるから、此のあとへ乗るんだ。」掛りの男にかう斷ると、例の氷包を額へあてながら、私は遮二無二人ごみの流れに逆つて、周章狼狽して、惡魔に迫はるゝ如く構外へ逃げ延びた。さうして、ベンチへどたりと崩れて、漸く胸を撫で下した。何處かで後指を差して自分の様子をゲラゲラ嗤つて見て居る奴があるかも知れん。……：

「こんな筈ではなかつた。酔つてさへ居れば、何とか神経の眼を盗んで、そうツと胡魔化して行ける筈なのに、一體今日はどうしたんだらう。事に依ると、己の神経はモウ酒の力でも麻痺されないほど病的に興

奮して來るのではあるまいか。」

とう／＼二時になつた。此の上一分でもグズグズして居たら、三時は愚か四時になつても、目的地へ到着出來さうもない。若し此の機會を逸して了へば、どうしても最近に原籍地の検査日までに、東京へ歸らなければならぬ。

「私は汽車へ乗ると、氣違ひになるか、死ぬかしますから、検査までにはとても東京へ行かれません。」こんな理由を、區役所の兵事掛へ書いて送つたら、どうするだらう。「死んでも、氣違ひになつてもいいから、是非検査までに歸つて來い。」と云ふだらうか。さうなれば、意地にも汽車へ乗つて、氣違ひになつて歸つてやりたいやうな氣もする。

「そら御覽なさい、君達があんまり無理を云ふもんだから、僕は此の通り氣違ひになつたぜ。嘘ぢやない、ほんたうに氣が違つちまつたんだ！」

かう云つて、泣きツ面をして、検査の當日に暴れ込んでやりたい。

其の時、臨場の軍醫は何と云ふか知らん。

「いや、よく歸つて來た。よく氣違ひになつてまで歸つて來た。お前は義務に忠實な、感心な人間だ。」と、冷やかな辯舌で褒めてくれるだらうか。

私は尙もスキューを叫りながら、愚にもつかない連想の絲を手繰つて、其れから其れへと馬鹿々々しい考へを頭に浮べ、獨りで笑つたり、怒つたり、業を煮やしたり、いまいましてがつたりした。

實際眞面目に思案して見て、死ぬか、狂ふか、當分東京へ戻らずに居るか、此の三つ以外に差しあたつて

の道はないやうであつた。死ぬのが嫌なら、狂ふのが嫌なら、どうしても萬難を排して、即刻一瞬の猶豫もなく、大阪へ出發しなければならぬ。

けれども若し、大阪へ行かれないで、電車の中で卒倒するやうな事があつたら……

「あゝ」

私は深い溜め息をついて、恨めしさうに電車の影を睨みながら、ベンチから立ち上つた。一層いっせの事、やぶれかぶれに先斗町ほんとうちやうへでも遊びに行かうか、それとも、もう少し此處に辛抱して、氣分の靜まる折を待つて居ようか。だんだん日が暮れて、晩になつて、夜が更け渡つて、最終の電車が出て了ふまで、つくねんと蹲踞うづくまつた揚句やつぱり望みを達せずに、空しく木屋町へ戻る事になつたら、却つてあきらめが着いてせい、せいするだらう。

「や、Tさん、これから執方どちらへお出掛けです。」

聲をかけられて振り返ると、其れは友人のK氏であつた。面長おもながの冴え冴えした目鼻立めはなだちに、きれいな髪の毛を前の方だけきちんと分けて、パナマ帽を心持ち阿彌陀あみだに冠り、白足袋を穿き雪駄をつツかけて、なかく輕快な服装をして居る。私は、何か犯罪が露顯した如くギョツとして、

「ちよいと大阪まで……」

と、口籠るやうに答へて、にやにやと變て、こな笑ひ方をした。

「あ、さうですか、いつかお話しの徴兵の事で……」

K氏は直ぐに合點がてんして、

「わたくしも今日用事があつて、伏見まで参ります。そりや丁度よい所でしたな。御一緒に中途までお供ませう。」

「えゝ」

「Tさんに御紹介します。此れは私の友人のAさんで……」

と云ひながら、K氏は委細構はず自分の伴れの男——色白の小太りに太つた可愛らしい、八字鬚を生やした、三十二三のドクトルを紹介した。

「さあ、そろ／＼乗らうぢやありませんか。どうぞお先へ。」

「えゝ、ありがと」

私は依然煮え切らない挨拶をして、其の癖K氏に勧められるまゝずる／＼と引き擦られるやうに、あの恐ろしい、物凄い、電車の傍へ近寄つて行つた。

「さあ、さあ、どうぞお先へ。」

K氏は何度もかう云つて、兩手で私の腰を煽るやうにした。

「それでは、御免蒙ります。」

思ひ切つて、眼を潰つて、私はひらりと昇降口を跨いだ。さうして、室内へ入ると即座に吊り革へぶら下つて、キスキーの喇叭飲みをやつた。(腰をかけて了ふよりは、まだ吊り革にぶら下つて居る方が、いくらか運命の手を弛められて居るやうに感じるのだ。)

「どうもお盛んですな。餘程御酒を召し上ると見えますな。」

と、Aさんが云つた。

「ナニ僕は電車が嫌ひですから、酒に酔つてゐる居ないと、氣持が悪くなつて仕様がないます。」
私は、醫者に話をするとしては、少し理窟が立たぬやうな辯解をした。

クワオーツと笛が鳴つて、電車がとう／＼走り出した。

「いよ／＼己は死ぬのかな。」

と、私は心の中で呟いた。斷頭臺へ載せられる死刑囚の氣持も、此れと同じに違ひないと思つた。

「Aさんどうです、Tさんは検査に合格しますか知ら。」

K氏がこんな質問をする。

「さうですなあ。あなたは取られさうですなあ。何しろむくむく太つて居て、立派な體格ですからなあ。」

左右の窓には、京都の市街が盡きて、郊外の青葉や、樹木や、往還や、丘陵がどんどん走つて居た。ひよつとしたら、無事に大阪へ着けるかも知れないと云ふ安心が、其の時漸く私の胸に芽ざした。